

巻 頭 言

日毎に春のいぶきが感じられるこの頃、古い年度が去り、新しい年度が始まろうとしている。昨年10月には天童で第10回 教員教育論文発表会が開催され、地理的な悪条件にもかかわらず、多数の参加者があり成功のうちに終了した。これには、山形大学の関係者の方々の努力や魅力によるところも大であったと考えられるが、年毎に発展して今日に到った東北教員教育学会が注目を集めるように成長したことも理由の一つにあげられるのではなからうか。

教員教育の研究が、その場限りのプリント作成に限るものではなく、また時流に乗って拡声器の代用を助めるのでなく、着実に糧を上げていくことが重要であることは明らかである。我が国において、教員史の研究が学問として認められたのは極く最近のことである。教員教育は、各教員養成学部には学科目として存在し、制度上からみれば、教員史と比較して恵まれている。さらに、昭和52年度からは科研費の一分科として「科学教育」が設置され、教員教育の研究が学術会議などから正式に学術研究として認知された。我々教員教育研究者の努力によって、教員教育の研究も名実ともに一つの学問とする道を着実に進んできたものである。西ドイツでは数年前に Bielefeld 大学に教員教育研究所が設置され、活動を始めたと聞く。

さて、東北教員教育学会の会員は、もう一つの会である東北・北陸教員教育基礎的研究会とも連絡があり常時出席できるようになっている。この両者の関係は大変スムーズであり、むしろ相互補完的であると言えよう。後者はシンポジウムの形式をとり、勉強会的色彩をも強く持っているように思われる。したがって、と言うわけではなからが、東北教員教育学会の今後に期待されることは、この学会の会則第二条 目的 に記されているような活動であり、教員教育の基礎的科学的な研究を進め、質的に益々高く、権威ある学会へと成長していくことである。

このためには、我々会員の研究を高めることが第一であるが、より多くの会員がこの学会に加入し、年會にも積極的に参加し、より高い水準の年報を発行するようになるべきであろう。また、年報については内容の質的な向上のみでなく、形式的にも整備し、各地の教員教育の実践者、研究者に活用される方向を目指し努力も今後必要のように思われる。

1977年3月

秋田大学教員教育部 渡三郎